



2011 年度  
アンコール遺跡整備公団  
インターンシップ報告書

金 沢 大 学

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

2011 年 12 月





写真 1. 始業式前に公団本部玄関にて（後列右から、  
畠中瞳、河原由貴、大沢紗布、宮本亜由美、福田  
静、藤巻晴香、荒木祐二、松田渚、前列右から、  
辻谷友紀、山口莉奈、村上栞、大久保陽葉、岩永  
有加、藤谷真有、小宮山遥）

写真 2. 公団本部での始業式. 正面に座っているの  
がハン・プウ副総裁（左）とクン・クンニェ副総  
裁（右）.

写真 3. 始業式後にアンコール・トムでの業務につ  
いての説明を公団担当者からうけるグループ 1.

写真 4. 始業式後に北バライでの業務についての説  
明を公団担当者からうけるグループ 3.



3

4



1

2

3

写真1. 毎朝、チューターたちを中心にその日の担当業務についての情報交換.

写真2. それぞれの業務地へは公団職員たちとともにバイクで移動 (グループ4).

写真3. 公団職員の案内でシェムリアプ川のダムを見学するグループ1.

写真4. 北バライの現場で公団職員と業務の打合せを行うグループ3.

写真5. 西バライへの水路の建設状況を視察するグループ4.

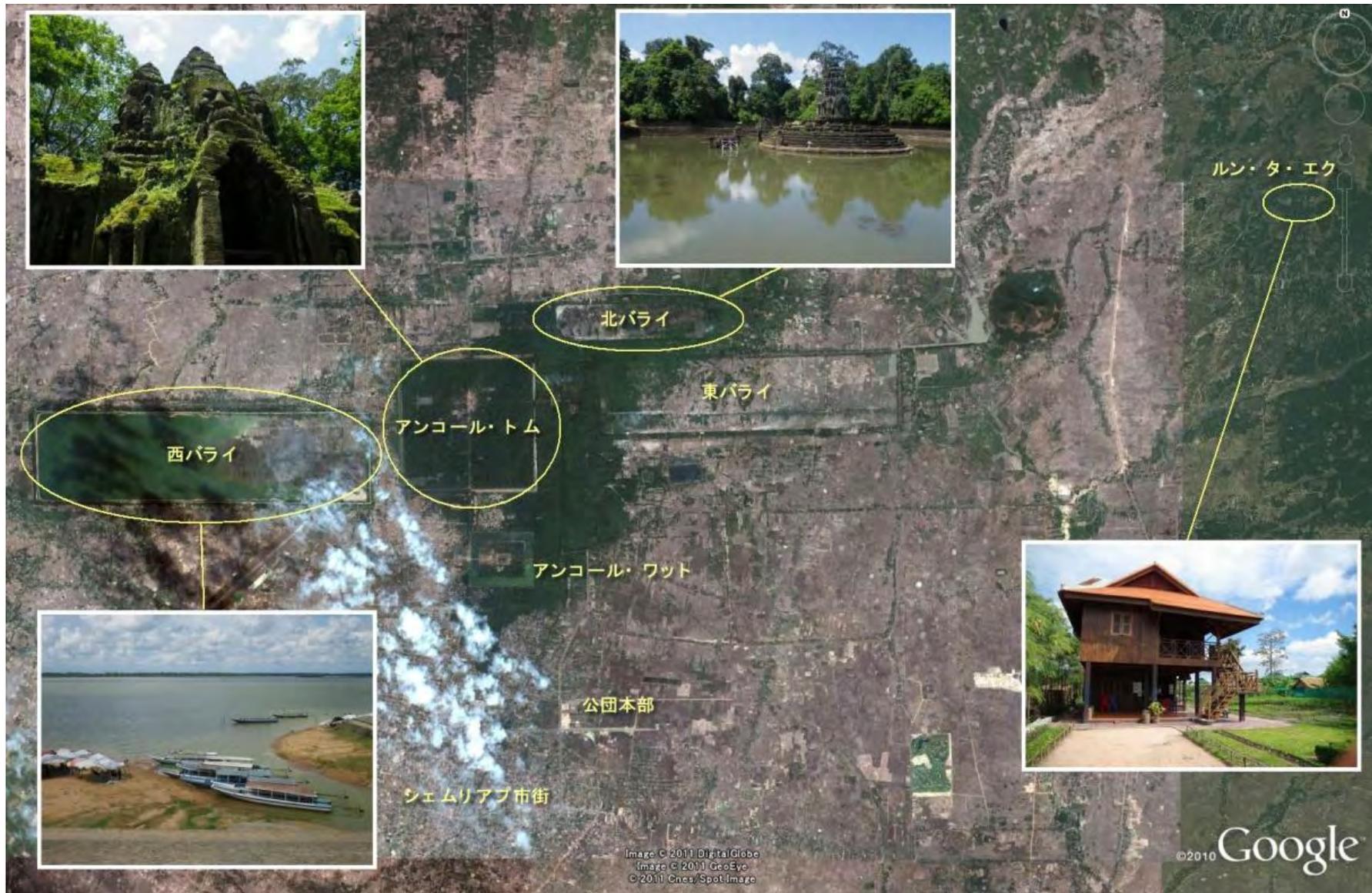
写真6. アンコール・トムの水路にて公団職員と業務の打ち合わせを行うグループ1.

5

6



写真1. 業務後はアンコール遺跡公園を自由に見学。  
 写真2. 休日に全員で訪れたトンレサップ湖氾濫原のハス畑。  
 写真3. 日本大学大八木英夫さんの案内でクバル・スピエンのシェムリアプ川源流へ。  
 写真4, 5. 最終日に受入責任者のハン・プゥ副総裁と面談するグループ1 (4) とグループ4 (5)。  
 写真6. お世話になった公団職員たちと最終日の昼食会後に記念写真。



学生たちの業務地（グループ1：アンコール・トム，グループ2：ルン・タ・エク，グループ3：北バライ，グループ4：西バライ）

## 2011 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

### 目 次

1. はじめに	鹿島正裕 . . .	1
2. インターンシップの成果と今後の課題	塚脇真二 . . .	2
3. 参加学生たちの報告		
1) 現地へ行って学ぶことの大切さと世界遺産の地で感じたこと	藤巻晴香 . . .	7
2) 視野を広げることの大切さ	藤谷真有 . . .	9
3) さまざまなことを学んだ 2 週間	福田 静 . . .	11
4) インターンシップでの成長	岩永有加 . . .	14
5) カンボジアから学ぶ世界観	大久保陽葉 . . .	16
6) 北バライチームでの業務と感じたこと	村上 栞 . . .	19
7) カンボジアでの生活	大沢紗布 . . .	22
8) カンボジアで得たもの	山口莉奈 . . .	24
4. チューターたちの報告		
1) 2 度目のカンボジアで学んだコミュニケーションの方法	畠中 瞳 . . .	27
2) チューターとして参加した 2 度目のカンボジア	宮本亜由美 . . .	29
3) 2 回のインターンを通して学んだ最も大切なこと	河原由貴 . . .	31
5. 事務職員の視点から見たアンコール・インターンシップ	辻谷友紀 . . .	33
6. 資料：2011 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要	塚脇真二 . . .	39

図版 1：インターンシップ初日の始業式と公団職員との打合せ.

図版 2：インターンシップでの現場業務のようす.

図版 3：休日とインターンシップ最終日.

図版 4：アンコール遺跡世界遺産公園と各グループの業務地.



## 1. はじめに

金沢大学人間社会学域国際学類長 鹿島正裕

ここに報告する「カンボジアのアンコール遺跡整備公団インターンシップ（就業体験）」は、金沢大学が初めて組織的に取り組み実施した海外インターンシップ事業です。国内でのインターンシップはもはや当たり前のことになっていますが、海外インターンシップを組織的に実施している大学はまだ珍しいので、その成果や教訓をご報告いたします。

本学とカンボジアとの交流は、環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授を中心に長年研究協力が続けられ、その実績に基づき、2010年2月にアンコール遺跡整備公団およびカンボジア工科大学と本学の交流協定が締結されました。それによって、学生インターンをアンコール遺跡整備公団で受け入れていただくことが可能となりました。

人間社会学域の国際学類は、グローバル化が進む現代社会で、国内外で重要になってきている国際関係業務に対応できる人材を養成することを目的にしておりますので、海外での短期留学や語学研修を奨励することに加えて、インターンシップも選択可能としています。先進国の都会で半月も暮らすと多額の費用がかかりますし、外国人学生を2週間も受け入れて就業体験させてくれる団体など国外では簡単には見つかりません。そのため他大学では、海外留学・インターンシップを斡旋する民間業者を学生に紹介して、個人で行ってもらう場合が多いように見受けられますが、アンコール遺跡整備公団にインターン学生を受入れていただくことができたのです。

このインターンシップは、国際学類が中心となって参加者を募集し、2010年には国際学類生6名に他学類・大学院生6名の計12名を、9月4日から19日までの半月にわたって派遣しました。学生たちは、数ある世界遺産のなかでも白眉の一つと言えるアンコール遺跡を見学し、外国で生活し、世界遺産の整備業務の一端を手伝い、教えてもらうという貴重な経験をすることができました。その成果を11月28日に金沢市中心部の「しいのき迎賓館」で一般向けに報告するとともに、「アンコール遺跡公団インターンシップ報告」として発表しました（金沢大学人間社会学域国際学類刊行）。

ただし12名は公団にとって負担が大きすぎたということで、2回目の本年は8名の受入れになりましたが、昨年参加した学生中3名を「チューター」として派遣しました。また事務職員の辻谷友紀氏も広報と海外研修を兼ねて同行してくださったので、塚脇教授や他の教員の負担は軽減されました。期間は8月20日から9月4日のやはり半月、構成は国際学類生5名、他学類生3名でしたが、昨年同様大きな成果をあげることができました。しかもほとんどのインターン生は日本学生支援機構の留学生交流支援事業による補助金を受けることができました。

それでは以下の塚脇教授と辻谷氏、そして学生たちの報告をどうぞお読みください。

## 2. インターンシップの成果と今後の課題

環日本海域環境研究センター 塚脇真二

### 1. はじめに

カンボジアのアンコール遺跡整備公団（略称アプサラ公団）での学生インターンシップは昨年度に続いて2度目の実施となる。昨年度の反省をふまえて改善すべき点はすべて改善してのぞんだ今年度のインターンシップである。同公団本部の総合移転と時期が重なってしまう不運はあったが、事故や事件はおろか記憶に残るような問題すらないまま順風満帆のうちに全予定を終了することができた。これもすべて学内外の関係者各位ならびに同公団関係者諸氏のご支援のたまものとまず感謝したい。また、不慣れな国外の地でありながらも旺盛な好奇心とともに積極的に業務に従事した参加学生たちや支援業務を的確に実施しつづけたチューターたちにも感謝の意を表したい。さらには、インターンシップ期間の終了後に滞在地のシェムリアプ市が2年ぶりの洪水に見舞われたことを考えると天の幸運にも感謝しておきたい。

以下、昨年度からの変更点、現地での活動と成果、そして今後の問題と解決案について順に記述する。

### 2. 昨年度からの変更点

今年度のインターンシップの実施にあたっての変更点は以下の6点である。

(1) 参加学生数を12名から8名に減らした。これは12名では業務への支障が生じるといふ公団の意向を受けてのものである。これとともに全2週間のインターンシップ期間中、1週目と2週目とで業務内容を入れ替えるという昨年度の方式をとらず、2名ずつの4グループに分かれた学生たちは2週間をとおして同じ業務に従事した。これは公団職員の負担を減らすとともに、学生たちに業務の理解をより深く求めたいという公団側の意向である。なお、参加学生は国際学類の3年生5名、人文学類2年生2名、経済学類2年生1名の8名でありすべて女子である。協調性に欠ける学生の参加がなかったことは幸いであった。

(2) 昨年度は単位認定の基準や周知が不徹底であったためか、学類や学年によってはインターンシップでの成績を公団に認定されながらも本学では何の単位も得られないという不公平が一部の学生に生じていた。今年度は国際学類の3年生全員にはインターンシップの単位がもちろん認定され、人文学類ならびに経済学類の2年生には異文化体験実習の単位が認定されることになっている。

(3) 事実上の引率教員を廃し、それにかわって昨年度のインターンシップに参加し好成績をおさめた学生3名（国際学類3年2名、人文学類3年1名、すべて女子）をチューターとして同行させた。チューターたちの業務は、現地での生活や公団での業務にかかる参

加学生たちの相談相手、学生たちと公団あるいは塚脇との間に入っての連絡の仲介、学生たちの安全管理の補助と多岐にわたるものであったが、彼女らはこれらをじつに的確にかつてぎわよくこなしてくれた。塚脇の負担がおおいに軽減されたことはもちろんのこと、同世代でありながら現地になれた彼女らの存在は参加学生たちにとって安心を与えるものであった。

(4) インターンシップの全日程をとおして北地区学務第一係の辻谷友紀氏を本学から派遣していただいた。公団の業務全般にわたる視察とその全容の理解とが同氏派遣の主目的であったが、上述のチューターたちと連携しての学生たちの安全管理や連絡の仲介といった業務にも従事していただき、これがインターンシップの円滑な運営をもたらした。また、学生たちにも公団職員にも愛されるその温厚な人柄は、業務内外におけるあらゆる面でまたとない潤滑油として機能していた。

(5) 筆者が代表をつとめるアンコール遺跡世界遺産公園環境調査チーム（略称：チームERDAC）の若手3名（鹿児島大学本村浩之教授、埼玉大学荒木祐二准教授、日本大学大八木英夫助教）が、インターンシップの実施期間にあわせて現地調査を設定し、この期間をとおして少なくともひとりには現地に滞在するように心がけてくれた。これは塚脇に万一の事態が生じたとき、現地事情を熟知し公団にもその存在が周知されている彼らのほかには塚脇の代行がつかまらないためである。幸いにもそのような不測の事態は生じなかったが、彼らの存在は学生たちにとっても心強いものであり、休日には集落周辺の植生調査やシェムリアプ川の源流調査などに学生を連れ出してくれたことも効果的であった。さらに、昨年度同様、国際学類鹿島正裕学類長にも現地調査期間をこのインターンシップの時期に合わせていただいたが、これも学生たちにはおおきな安心感をもたらした。

(6) 改善点ではないが、今年度のインターンシップ参加学生たちは日本学生支援機構の支援金をそれぞれ8万円受け取ることができた。カンボジアは日本から近いため航空券代が比較的安く、かつ現地滞在費用も低物価のためそれほどものではないが、この支援金によって学生たちの経済的な負担を約半分に減らすことができた。なお、このインターンシップに参加する直前まで韓国でのスタディツアーに参加していた1名は、同機構が指定する出入国基準（現地での活動開始の1週間前以降に出国し、活動終了後は1週間以内に帰国する）を満たせないためこの支援金を受け取っていない。

### 3. 現地での活動、成果、など

インターンシップ期間中の現地での学生たちの活動の委細については学生たちの報告書を参照されたい。一方、このインターンシップの成果は昨年度と同様に以下の3点に集約される。学生たちへの「教育効果」、成果の「現地への還元」、そして本学の国際貢献にかかる「周知（宣伝）」である。以下に列記する。

(1) 学生たちが大きな満足と大きな経験とを確実に持ち帰ることができた（教育効果）。華やかに喧伝されるばかりの世界遺産であるが、その維持管理や観光客の便宜のためにど

れほどの労力とその裏側で費やされているかを公団での業務をとおして参加学生たちは実体験することができた。また、昨今のはやりの言葉である「持続可能な・・・」のために、どれほどの苦労がその背後あるのかも身をもって経験した。「最初のイメージとはおおしく違っていた」とは昨年度同様に多くの学生から聞かされた感想である。これとともに「貧しい発展途上国」というイメージが先行するカンボジアのくったくのない人々や豊かな自然に学生たちは日々触れることもできたし、さらには国際協力の舞台であるとともに地域住民が暮らす世界遺産公園の特異性を目の当たりにした。「国際貢献」と「地域社会」という2つのキーワードを学生たちは見たことになる。学生たちの事後報告書にはこの2週間の体験が生き生きとつづられている。したがって、インターンシップの2週間は学生たちにとってきわめて充実したものだだったと客観的に評価されよう。これはこのインターンシップの実施が学生たちへもたらしたおおきな教育効果といえる。

(2) 学生たちを指導することによって公団職員に大きな教育効果をもたらした(現地への還元)。参加学生たちはそれぞれの業務の担当職員たちとともに公団の通常業務に従事した。学生たちの同行が彼らの業務の支障になったことは事実であるが、インターンシップ終了後に公団上層部から、学生たちの存在が職員たちに大きな教育効果をもたらしたことを昨年度同様に感謝の意とともに指摘された。具体的には、1) 学生たちを案内することで職員たちの「説明」の技術が向上したこと、2) 職員たちが説明する「楽しみ」や「喜び」を味わったこと、3) 業務についての全般的なことを学生たちに説明することで、職員たち自身が業務内容を総括することができたこと、などである。なお、インターンシップの時期が公団本部の総合移転と重なってしまったため、学生たちの業務にかなりの支障がでてしまったことや、昨年度ほどの実習プログラムを組むことができなかったことについて公団上層部からお詫びの言葉をいただいている。

(3) 学生たちの活動がアンコール世界遺産公園で大きな話題となった(宣伝効果)。昨年度同様に安全管理の視点から、参加学生たちはアンコール遺跡整備公団の制服を着用して日常の業務に従事したが、カンボジアではエリート集団として知られる同公団の制服を日本人の学生たちが着用するのはきわめて目立つものであり、現地の人々や日本語観光ガイドたち、彼らが案内する一般日本人観光客におおいに注目された。昨年度のインターンシップ実施後の公団からの意見をふまえて、今年度の参加学生たちが制服の右腕に本学のロゴをつけて業務にのぞんだことも効果的だった。したがって、このインターンシップは世界遺産における本学の国際的な貢献活動として宣伝効果をあげたといえよう。

#### 4. 今後へ向けての問題点と解決案

インターンシップ期間ならびにその後の渡航において、公団側受け入れ責任者であるハン・プウ副総裁ならびに公団担当職員たちと、次年度以降のインターンシップにむけての改善点などを協議した。既述のとおり、公団本部の総合移転と時期が重なってしまったことへのお詫びが公団側からあったものの、そのような時期にもかかわらず学生たちを受け

入れてくれたことに感謝の意を表したいこと、ならびにこの移転業務が職員数千人をかかえる公団の規模を知るうえで学生たちにはいい体験になったことを伝えた。

これまで述べてきたとおり、昨年度の反省点をふまえ、そのすべてを改善して実施した本年度のインターンシップであっただけに、あらゆる面において満足のできるものであったと結論づけることができる。この点は公団側もまったくの同意見であった。2年連続してのこのインターンシップの実施によって来年度以降もこれを継続するための基礎は十分に確立できたといえよう。来年度もインターンシップを受け入れるという快諾は公団から得られている。しかし、これを長期的に継続するとなるといくつかの問題点が指摘される。

第一に、今年度のインターンシップは国際学類や本学の全面的な支援のもとに、有能なチューターを現地に置くことができたし、事務からは辻谷氏を派遣してもらった。さらには万一の事態にそなえて研究チームからは他大学ながらも3名の若手教員がこの実施にあわせて現地に滞在してくれた。学生たちには日本学生支援機構からの経済的な援助もあった。これ以上の支援体制は想定できないほどの充実ぶりである。しかしながら、この体制が構築できたのは、ひとえに全関係者の努力と好意のたまものであり、その継続性となると不安がまだまだ残るものといえる。したがって、このインターンシップで得られる成果の大きさを参加学生ならびに本学の双方で考えると、学内における経済面ならびに人材面での継続的支援体制の確立がのぞまれる。

次に、口はばつたい言い方になってしまうが、このインターンシップは塚脇個人と遺跡整備公団との長年にわたる信頼関係のもとに実施されている。したがって、塚脇に万一の事態が生じたとき、あるいはインターンシップにあわせての渡航が不可能となったときのことが懸念されるが、全学的な企画であるこのインターンシップの実施が個人の都合に左右されることはぜひでも避けるべきといえる。しかしながら、塚脇のかわりがつとまるだけの人材は現在の本学には存在せず、そのような人材の短期間での養成は不可能である。これを解決するには、塚脇と同じく公団の信頼を得ている研究チームの若手メンバーたちが所属する大学との連携、たとえば合同インターンシップやスタディツアー、現場実習などとの組み合わせなど、が考えられよう。

最後に、今年度の参加学生は3年生のすべてが国際学類の所属であったため問題とはならなかったが、アンコール遺跡整備公団での学生の業務体験はインターンシップとはみとめないという決定を一部の学類がぐだしたと耳にしている。全学的な企画としてのこのインターンシップの実施を考えると、学類によって足並みがそろわない状態は避けるべきと考える。したがって、インターンシップ全般にかかる見解の全学的な統一が早急にのぞまれる。



### 3. 参加学生たちの報告



## 1) 現地へ行って学ぶことの大切さと世界遺産の地で感じたこと

人間社会学域国際学類 3年 藤巻晴香 (グループ 1)

今回のアンコール世界遺産インターンシップで私は約 2 週間カンボジアに滞在し、アンコール遺跡整備公団で 10 日間お世話になった。参加前はカンボジアについてもアンコール遺跡群に関してもほとんど無知であったため、書籍やインターネット等を利用して基本情報や歴史や文化についての知識を少し得てから参加した。しかし、実際に現地へ行き担当者の方から業務の説明やアンコール遺跡、カンボジアのことを聞くと、知らないことや驚くことばかりだった(写真1)。おかげで毎日が発見の連続でとても楽しく、有意義で貴重な 2 週間であったが、その半面自分の教養と知識の乏しさに愕然とした。また、『百聞は一見に如かず』ということわざがあるように、どれだけ文字や写真や映像で事前に学習したつもりでも実際に自分の五感を通して得たものは比べ物にならないほど鮮明で、理解を超えて新たな疑問が頭に浮かぶことも少なくなかった。この経験から日本の机上での国際理解の限界を感じたことも事実だが、実際にその土地を訪れることでしか得ることができない感動があるということも実感することができた(写真2)。何よりもカンボジアの人々や衣食住などの文化に触れられたことは日本の文化や自分自身の生活を見つめなおすきっかけにもなった。

また、アンコール遺跡整備には世界各国の組織も参加し、活動を行っている。実際に活動現場を見ることもあれば、遺



写真1. アンコールの歴史を教わる



写真2. 視察で訪れたアンコールトムのバイヨン



写真3. タプローム寺院での修復作業



写真4. バコン寺院で説明を受ける

跡の前に修復プロジェクト参加国の紹介版が設けられている所も数多くあった（写真3）。もちろん日本からも大学のチームやJASAなどが活動を行っている。そうした活動を見聞きし、各国がそれぞれの得意な分野（発掘、修復、調査など）を生かしてアンコール遺跡という大きな世界遺産を一緒に守り続けているというところに国際協力の真の姿があるのではないかと感じ、こうした取り組みが国際理解にもつながると思うので、これからも世界中の人々の手によって守られ続けて欲しい。

海外へ行くのは今回が初めてというわけではなかったが、それでも今プログラムでの約2週間の滞在期間中に得られたものは本当にたくさんあった。また、これからの自分の課題も見えてきた。一つには語学力の向上だ。現地ではほとんど

英語でコミュニケーションをとっていたが最初は思ったように聞きとれず、自分からも上手く伝えたいことが伝わらなかった。日ごとに慣れていき最後の方ではだいぶ良くなったが、それでも完全に意思疎通ができたことは少なかった（写真4）。もう少し英語を駆使できれば理解度も違い、もっとたくさんの人と会話を楽しむこともできたのではないと思うと悔しい。これからは少しでも英語に触れる機会を増やして世界中の人と会話が楽しめるようになりたい。二つ目にこれから自分は残りの大学生活で何を学ぶか、ということを考える機会となった。今までただ単にカリキュラムに沿ってなんとなく学習を続けてきたところがあったが、それでは自分のためにもよくないことはもちろん、もったいないと思うようになった。もっと世界の現在も過去も知りたいし、これからの世界も考えていきたい。学んだことが将来の仕事やその先につながるかどうかは分からないが、今学習したいことを積極的に学ぶ姿勢を持ち続けたいと思う（写真5）。



写真5. グループ3もまじえての昼食

## 2) 視野を広げることの大切さ

人間社会学域人文学類2年 藤谷真有 (グループ1)

私は、このインターンシップで初めて日本の外にでました。テレビなどの情報やインターネット、実際に行ったことのある人の話をきいたりして、外国で学ぶということに関して強い憧れは持っていました。また、大学の自分のコースで中国やチベットのお寺やインドの石窟寺院について学んでいるので、インドの影響を受けながら独自の文化を築いたと言われるアンコールに興味を持っていました。

カンボジアへ行ってからのインターンシップでは、アンコールトムとアンコールワットにかかわる水路(堀など)を整備するプロジェクトを行っているチームと一緒に2週間行動しました(写真1, 2, 3)。アンコール遺跡整備公団の業務内容に水の管理があることは知っていましたが、インターンシップ前は水を管理することと遺跡を管理することが私の頭の中では全く結びついていませんでした。しかし、アンコール遺跡の土台は土できており、遺跡が崩れないようにするためにはその土が一定の水分を含んでいなければならないと知り、遺跡のために水を管理することの重要性を理解しました。それから、堀や貯水池に水を入れることには、昔の景観に戻すという意味もあると公団の方や日本人の研究者の方がおっしゃっていました。また、実際に水路や水門を視察に行く中で、道路や林の中の水はけが悪く、雨がふると一面水浸しになってしまう場所をたくさん見ました。住民や観光客が遺跡の中を快適に動き回



写真1. アンコールトムの堀の発掘現場



写真2. アンコール時代の水路跡



写真3. 西バライ貯水池

れるようにするためにも水路の管理は重要であると感じました（写真4）。

カンボジアには雨季と乾季があります。私がカンボジアへいった8月・9月はカンボジアでは雨季であり水が豊富にありました。しかし乾季ならば水は減り、水の管理の上で今とは全く違う問題がでてくるのだらうと思いました。雨季に堀や貯水池にたくさん水を入れる事は、乾季の間の人々の生活にとっても大切なのだらうと思います。



写真4. 遺跡公園の路上にたまった水

実際にカンボジアへ行き、カンボジアの人々と話し、アンコールについて学んでみて、本や資料でみたり話を聞いたりすることと、実際に行って体験することには大きな隔たりがあると改めて感じました。本や資料は一面的な見方で書かれていたり、作成者に不都合なことは書かれていなかったり、そもそも自分の知りたいことについての情報が不足していたりします。また、自分の考えの甘さ、視野の狭さゆえの隔たりもあると感じました。自分が探すのでどうしても情報が片寄りがちになってしまいます。（たとえば、今回インターンシップに行って、事前学習で遺跡の歴史や造りについては調べていましたが、遺跡の地下については全く調べていなかったということに気づきました）実際に現地に行って、様々な人から様々な考え方を聞き、行く前よりも多くの視点からカンボジアやアンコールについて考えられるようになったと思います。

### 3) さまざまなことを学んだ2週間

人間社会学域国際学類3年 福田 静 (グループ2)

私は、8月20日から9月4日まで、アンコール遺跡整備公団インターンシップに参加しました。アンコール遺跡整備公団（以下アプサラ）では、水資源管理部門の方々がインターンシップの受け入れをして下さいました。アンコール遺跡整備公団はアンコール遺跡群の維持管理や環境保全を行っていて、その中でも水資源管理部門は、アンコール・ワットの環濠などの水質管理や水位の調整、大気汚染の観測などといった事業を行っています。私は、水資源管理部門が地域振興部門などの他の部門と共同で行っているルン・タ・エク・エコビレッジにおける伝統村落再生計画に携わりました。

遺跡とは直接関係のない事業のように思えますが、このプログラムが始まったきっかけはアンコール遺跡公園と関わりがあります。アンコール遺跡公園は、世界文化遺産でありながら、その中に住民が住んでいます。私は今回たくさんの遺跡を訪れることができましたが、遺跡内で子供が遊ぶ姿などもよく見られ、そこに住む住民のありのままの姿が見られるというのもアンコール遺跡公園の魅力的な点の一つだと感じました（写真1、2）。しかし、観光地化や開発が進むことによって住民は増加し、環境汚染や文化的景観の破壊を懸念する声も挙がっています。アプサラは公園内の文化的な風景と遺跡保護のために家の数を制限したいと考え、新しく家を建てようとする人々をルン・タ・エクという遺跡公園外の地域に住むように勧めることで、遺跡公園内における家や人口の増加を防ごうと考えたのです。それまで家族と住んでいたけど結婚したことで独立して新しく家を建てようとする若い夫婦を特にターゲットとし、



写真1. アンコール・ワット寺院



写真2. アンコール・トムのバイヨン寺院

彼らはアプサラから無料で家を建てる材料や日用品を得ることができます。水資源管理部門のスタッフは、このルン・タ・エクで、池の水をくみ上げる風車の整備、運河の建設、灌漑システムの導入などを主に行っています。また、ルン・タ・エクに住む人々の主な職業で収入源となるのは農業なので、水資源管理部門の管轄ではありませんが、アプサラは住民に農業技術を教えて職を提供するという事

業も行っています。そして将来的には、観光客がルン・タ・エクを訪れることができるようにしていくそうです（写真3）。

最初、この事業についてスタッフの方から説明を受けた時は、とてもすばらしい計画だなと思いました。アンコール遺跡公園内の問題を解決するとともに伝統的な生活を再現し、その生活を観光客が見て楽しめる。また、中心地から離れた場所に観光地を作ることで観光客を分散化し、中心地の負担を減らすことができます。実際にルン・タ・エクを視察してみて、風車や伝統的な家のある風景がとても魅力的に感じました（写真4）。しかし、この計画は理想だけでは簡単に進まず、様々な問題もあるのだということを知っていくうちにとても複雑な気持ちになりました。例えば、ルン・タ・エクにはすでに約100の家が建てられ住んでいる人もいますが、村の中にはまだ市場や病院がありません。シェムリアップの中心地からルン・タ・エクまでは、カンボジアの主な交通手段であるバイクで約40分かかります。とても不便な場所にあるにもかかわらず、住民の生活に欠かせない市場やなくてはならない病院が村の中にないのです。住民から不満の声も上がっているそうです。それから、小学校が建てられたのですが子供の数が少なくて実際は使われていないということも聞きました。また、住民の収入源確保のためのひとつの方法として観光地化することがありますが、実際に観光客が来られるような状態になるのはまだまだ先の話のようです。運河や灌漑システムを建設するには莫大なお金もかかるそうで、資金をどう確保していくかも重要な問題で、このルン・タ・エク・エコビレッジにおける伝統村落再生計画はとても長期的な計画だな、という風に感じました。

私は今回のインターンシップで、直接遺跡に関わる事業に携わることはできませんでしたが、ルン・タ・エクはただの観光客としてカンボジアに来ていたとしたら決して訪れることはできず、存在さえも知ることのなかっただろう場所なので、とても貴重な経験をさせてもらうことができたと思います。このルン・タ・エクにおける計画については悲観的な意見もいくつか聞きました。確かに、住民から不満の声も上がっているようですし、上手く計画が進んでいるようには思えませんでした。しかし、これから問題を一つ一つ早急



写真3. ルン・タ・エク エコビレッジ



写真4. エコビレッジの風車

私は今回のインターンシップで、直接遺跡に関わる事業に携わることはできませんでしたが、ルン・タ・エクはただの観光客としてカンボジアに来ていたとしたら決して訪れることはできず、存在さえも知ることのなかっただろう場所なので、とても貴重な経験をさせてもらうことができたと思います。このルン・タ・エクにおける計画については悲観的な意見もいくつか聞きました。確かに、住民から不満の声も上がっているようですし、上手く計画が進んでいるようには思えませんでした。しかし、これから問題を一つ一つ早急

に解決していき、この計画をただの理想だけで終わらせて欲しくないと思いましたし、この私たち日本人学生のアンコール遺跡整備公団でのインターンシップがこれから先もずっと継続し、この事業を始めとした様々な事業に少しでも良い影響を与えていくことができたなら良いなと感じました。

私は、約 2 週間のインターンシップを通して、改めて英語でコミュニケーションをとることの難しさを実感しました。特に、今回の場合はインターンシップ先が水資源管理部門ということで、日常会話の中では聞くことのないような単語も出てきて、スタッフの方が言っていることの全てを理解するのはとても難しかったです。また、自分の英語力はまだまだ未熟だと痛感させられることばかりで、相手の言っていることが理解できても上手く言葉を返すことができずもどかしく感じ、質問したいことがあっても上手く言いたいことを伝えることができない、という場面が多数ありました。ただの観光客としてカンボジアを訪れたのではなく、様々なことを学ぶためにインターンシップという機会を通して訪れたのだから、やはり積極的に学んで考える姿勢というのが大事だと思い業務中はそれを心がけていたのですが、言葉の壁にぶつかりあまり思うようにいきませんでした。その点に関しては大変悔しい思いでいっぱいです。しかし、それと同時にもっと英語を勉強して英語を使いこなせるようになりたい、という思いが強まったので、とても良いきっかけになったと思います（写真5）。



写真5. お世話になったスタッフたち

このインターンシップに参加する前は、世界遺産という華やかな表部分しか意識したことがありませんでした。ただの観光客としてではなく、インターンシップを通してカンボジアを訪れたことで、その華やかな世界の裏側にある様々な問題も見えてきて、観光地化と遺跡を含む環境の保護や地域住民の生活保護を両立していくことの難しさを肌で感じることができました。私はカンボジアに行く前から海外を訪れることがとても好きでしたが、カンボジアに行ってその気持ちますます強くなりました。日本で本やテレビやパソコンを通して得る知識や情報だけでは絶対に感じることをできないことを感じ、学ぶことができるからです。今後また海外に行く機会があれば、ただ観光をして楽しむだけではなく様々なことに興味を持って学ぶという姿勢を忘れず、今回のインターンシップのように自分にとってプラスになるような経験ができるようにしたいです。

#### 4) インターンシップでの成長

人間社会学域経済学類2年 岩永有加 (グループ2)

私は、8月20日から2週間カンボジアのアンコール遺跡整備公団という機関でインターンシップをさせていただきました。そこで感じたことや、得られたことについて書かせていただきます。

自分は海外とは縁遠いものだったので自分が海外でインターンシップをするというのは想像しがたいもので、行く前は正直なところ期待よりも不安の方が多くありました。国際的な関心についても世界経済についての関心は少しありましたが、世界の文化、宗教、政治などの関心もあまり高くはありませんでした。今まで授業で国際理解や比較社会について習っても、それが将来自分のためになるのかよく分からず、ただ授業を聞くだけという受け身の姿勢でした。

しかし、実際に海外へ行き現地の人と交流することで、その国の歴史や文化、言葉をもっと知りたいと思うようになりました。ガイドブックでカンボジアについて調べ、公団の方々に現地言葉を教わる中で、その国についての理解が深まりましたが同時にその国や人のことは地理的、歴史的なことも関係してくるので全てを理解するのは難しいとも感じました。授業を聞いているだけでは漠然としか考えられませんでした。実際に自分の目で見て、聞くことで日本との共通点や相違点、日本との関係や他国との関係についての理解を深めることができました。そして理解を深めるうえで重要なことが、自分の国について外国人に説明できなければならないという事だと感じました。

公団の方がカンボジアの降水量や気温を説明してくださり、「日本はどうか」と聞かれた時私は答えることができませんでした。自分の住んでいる国のことなのに分からなかったことが悔しかったです。外国のことを調べるのも大切ですが、両国との比較をするためにもまず自分の国のことを相手に説明できるくらい理解する必要があると感じました。今回のカンボジア以外にも興味を持った国について進んで調べ、視野を広げていきたいです。



写真1. 業務地のエコビレッジの風車



写真2. 完成したばかりのエコビレッジの水路

インターンシップで毎日楽しく充実した時間を過ごすことができましたが、一番の困難は言葉の壁という障害でした。私は英語に自信がなかったので自分が質問したいことを勇気がなくて言えなかったり、「質問したいことを英語で何と言えばいいのだろう」と考えているうちに聞きかけを逃してしまったりということが多々ありました。そのたびに自分の語学力、コミュニケーション力のなさを痛感しました。そして、聞かなかったことで後悔することが多くありました。自分から話しかけること、質問することは勇気がいることですが、その少しの勇気が出せず後で後悔することの方がよほどもったいないことだと思います。なので、上手く話せなくても積極的に伝えることが大切だと感じました。それには語学力も大切ですが、コミュニケーション力も同じくらい大切だということが分かりました。

そして、このインターンシップで積極的にメモをとる習慣が身につきました。書くことにより、頭で記憶するよりも記憶に残りやすく教わったことを振り返るのにも役立ちました。また、理解できなかつたところをメモして質問することができました。これは就職しても必要なことだと思うのでこの習慣を続けていきたいです。

私にとってこの2週間で得られたものは想像以上にとても大きいものでした。インターンシップの業務だけでなく全ての

ことが新鮮で楽しく、いい経験でした。あっという間の2週間でしたが自分にとって忘れられないものとなりました、またこの経験は自分にとっての強みになると思います。カンボジアでのお世話になった公団の方々やホテルの方々、村の子供たち、一緒にインターンシップを行った仲間たちみんながとてもあたたかかったです。日本では決して経験することのできない貴重な時間になりました。

私はこのインターンシップで自分から積極的に行動することが大切だと改めて感じました。これは海外だけでなく、日々の授業やバイトなどでも言えることだと思います。失敗することを恐れてチャンスを無駄にすることが多い自分を変えるきっかけになったと思います。当初外国に行くことに不安がありました。実際に行ってみるとそのような不安は全くなくなりました。そして、もっと色々な国に行ってその国のことを学びたいと思いました。外国で学んだことは自分の視野を広げ、将来の選択肢を増やし、自分自身を成長させてくれると感じます。また、自分の世界観、価値観を変えるきっかけを与えてくれると思います。これからも、語学力やコミュニケーション力の向上のために日々勉強し、次に海外に行く機会があれば積極的に質問したり意見を言ったりしたいです。



写真3. 壁にお絵かきする村の子ども

## 5) カンボジアから学ぶ世界観

人間社会学域国際学類3年 大久保陽葉 (グループ3)

私は、今回のアンコール遺跡整備公団インターンシップにおいて、初めてカンボジアを訪れた。アンコール遺跡の整備の業務はもちろん、現地の人々の生活の様子、食文化、国民性、街の様子や、そこで話されている言語など、身の回りのあらゆることが初めて知ることばかりで、カンボジアで過ごす1日1日が私にとって非常に貴重なものであった。

アンコール遺跡区域には9世紀から12世紀頃にかけて寺院として建てられた遺跡群が、世界各国からの援助で修復が重ねられ、現在に至るまで保存され、世界遺産に指定されている。世界中から人々が訪れる観光地として有名であるが、そこには村が存在し、住民が生活を営んでいるということを知った。業務で、遺跡区域内の様々な場所に行ったが、人間生活・自然・観光地が一体化しており、新鮮な光景であった(写真1, 2)。

今回、私は遺跡区域の北の方にある、「北バライ」の整備をする部門の業務に携わった。北バライは、面積が約3平方キロメートルあり、その中に巨大な貯水池が作られ、貯水池の中心にニャック・ポアンという遺跡がある(写真3)。私は、まず貯水池の水の管理について学んだ。遺跡の基盤は砂岩でできているため、一定量の水が確保され、地下に流れていないと遺跡が崩壊してしまう危険性がある。そのため、水路を作り森林から水を集め貯水池に水を溜める取り組みがなされている。また、この水路の水は遺跡のためだけではなく、周囲にあ



写真1. アンコール・ワット



写真2. 遺跡区域の民家



写真3. ニャック・ポアン

る水田にも利用される。人々の生活と遺跡の管理を同時に行うのは非常に難しいことであると感じた。また今は雨季であるため突然の降雨によって土手が決壊することも珍しくはなく、絶え間ない管理が必要であることも分かった。

また、次に貯水池の南端に沿った観光客用の遊歩道の整備について学んだ。観光客にカンボジアの自然をそのまま感じてもらいたいという意図があるため、あまり手を加えずに森をそのまま切り開いたような道を作り、道の所々にはカンボジアの植物が植えられていた。公団の方々の、自然をととても大切にしている姿勢がうかがえた（写真4）。



写真4. 北バライの育苗地

2週間のインターンシップを通し、華やかな世界遺産の裏では日々大変な努力が重ねられていることを知った。しかし、公団の方々は自分たちの仕事に誇りを持って生き生きと仕事をしていた。仕事をするうえで、仕事に対して誇りや責任を持つことは最も大切なことだと感じ、私も彼らのようになりたいと思った。また、地元の住民が、公団に雇われて実際の水路や遊歩道などの整備や遺跡の清掃に従事していた。公団の方と住民である労働者の人々はとても仲が良く、両者の間に築かれた信頼関係も遺跡区域の整備を進めていくうえでとても重要なことであると思った。

次に、異文化理解・国際協力という観点について感じたことについて述べる。まず、私が最も強く感じたのは、異文化を知る前に自国の文化を知ることの必要性であった。公団の方や地元の方と話す機会が多かったが、多くの方がアンコール遺跡の歴史、カンボジアの歴史や文化を熟知していた。また、自国に対する思いも非常に強いと感じた。反対に、私が日本について質問された時、歴史的な事象や日本文化については自信を持って答えることができず、とても悔しい思いをした。自分の国について無知な状態で海外で何かを学ぼうとしても、比較や意見交換ができないため、得るものは少ないと思う。また自分が海外のことを知りたいと思うのと同様、海外の人も日本について知ることを望んでいると思う。そのためにも、私たち日本人は日本のことをしっかりと学び海外に伝えていく必要があると思った。また、コミュニケーション手段として、英語



写真5. プラ・カーン寺院にて

を用いたが、自分の英語力が不十分なため、言いたいことが伝わらず迷惑をかけることもたくさんあり、英語の必要性を改めて感じた。

その一方、表情やジェスチャーを駆使して気持ちを伝えようと努力し、相手に伝わった時はとても嬉しく、言語や文化は違っても気持ちを伝えあうことのできる喜びや楽しさを知った。また、異文化に触れることで自分の価値観が変わり、視野を広げることができたと思う。行く前は、カンボジアは貧しい国だというイメージがあったが、実際に生活し、現地の人々と触れ合うとそのイメージは払拭された。物資環境こそ日本には劣るが、豊かな自然があり、そこで暮らす人々は、のびのびとしてとても幸せそうであった。ある公団の方の、「カンボジアは貧しいけれど不幸な国ではない。日本は先に発展し、今はとても素晴らしい国である。カンボジアはまだその途中にいるだけなのだ。」という言葉がとても印象的であった。日本中心の視点ではなく、様々な角度から世界を見るべきであり、互いに尊重し合うことで友好的な国際関係が気づいていけるのではないかと思った。



写真6. アプサラ職員たちとの昼食

このように、今回のカンボジアでのインターンシップを通して様々なことを学び、また自分への反省点もたくさん見つけることができた。また、カンボジアはもちろん海外の国に非常に興味を持ちはじめ、このように自分自身を大きく成長させてくれるであろう海外留学に対する意欲も湧いた。今後、今回同様、海外で生活し異文化に触れるという経験を通して国際的な視野をさらに広げていきたいと思う。また塚脇先生や公団の方々をはじめ、このインターンシップに関わった全ての方に感謝し、この貴重な経験を今後の学習や自分自身の人生に活かしていきたいと思う。

## 6) 北バライチームでの業務と感じたこと

人間社会学域人文学類2年 村上 栞 (グループ3)

私は今回、カンボジアの世界遺産、アンコール遺跡群の整備・管理を行っているカンボジア国立アンコール遺跡整備公団（アプサラ）へのインターンシップに参加しました。私は、昨年の大学の講義で遺跡の保護のためには、調査や保存・修復だけでなく、現地に利益が還元されるような活用も重要であると学びました。そして、実際の現場でどのような活動がなされているのか直に見たいと思い、このインターンシップへの参加を志望しました。また、海外でのプログラムということで、普段の生活とは違う文化や習慣を体験することを期待していました。

私は、北バライというアンコール公園の北側にある貯水池とその周辺を担当しているチームに入り二週間活動しました。このチームの主な活動は、北バライに水を入れることと、北バライの南側の旅行者のための道の整備でした。

古代にシムリアップ川から水を引いていた運河や入水口、排水口が壊れてしまったために、北バライには近年まで水がありませんでした。しかし、新しい運河や 2009 年には入水口を作り、川からではなく北の水田から水を集め、北バライに水が入るようになりました(写真1)。業務では、それらの新しい運河や入水口、昔の入水口、排水口の見学をし、説明を受けました。昔の入水口と排水口を修復して使うのではなく、古代の水管理技術の調査や観光のためにそのままにしているところが興味深かったです。北バライに入れる水は、北の水田から集めているので、農業を行う住民と遺跡との水の共有という課題を抱えています。遺跡の保存と人々の生活が密接に関わり、両方のバランスを重視しなければいけない点は、世界遺産の中に人が生活しているという特殊なアンコール遺跡ならではの課題です。遺跡の保存が住民の生活を妨げれば、保存活動は住民にとって無理利益なものでしかなく、遺跡の保存やその価値への



写真1. 北バライの昔の入水口



写真2. ニャック・ポアの中央の池

理解を深めるためには重要な課題だと思いました。

また、北バライの中央にはニャック・ポアンという遺跡があります（写真2）。中心の池の中央には塔があり、またその池の周りには4つの池があります。北バライに水を入れることによって、その池にも水が張っていました。チームの職員の一人が、水を張ると塔や彫刻が見えなくなってしまうから、池に水がないほうが良いと言っていました。私は水がある状態が本来の姿で、古代の人々が見ていた景観と同じ景観を見ることができると、水はあるほうが良いと考えました。

次に、北バライの南側には、徒歩や自転車しか通ることのできない幅2メートルの道を作り、そこを通る観光客に景色を楽しんでもらうためにその両側それぞれ幅20メートルに花が咲く木を植えるというプロジェクトが行われていました。木は道の東西の両端にある2ヶ所の育苗地で育てていました（写真3）。道幅が2メートルしかないのは、観光客に森の中を歩いているという感覚を楽しんでもらうためだけでなく、車を使わないことによって環境を守るという目的もありました。遺跡だけでなく、カンボジアの豊かな自然も観光に生かし、環境保全にも役立てようという発想は、自然破壊や地球温暖化などが深刻な問題になっている現代ではとても重要だと思います。



写真3. 北バライの育苗地

アップサラでの業務では、毎日遺跡公園内に行き、観光客やそこで働く人々を見ることができました。その中でも、遺跡公園内の清掃活動や遺跡の堀に水を引くための運河作りなどの様々な場面で働いている人々がいまいました。彼らは、アップサラに雇われている地元の住民でした。このように、遺跡の観光地化や保存が地元の人々の雇用を増やし、遺跡を保護する利益が地元還元されている形をみることができました。

二週間という短い期間でしたが、外国で過ごすことにおいてこのプログラムの参加前に一番不安に感じていたことは、やはり言葉です。カンボジアの公用語はクメール語ですが、アップサラのスタッフとは英語で会話しました。大学に入ってから英語を話す機会がほとんどなくなっていたため、自分の語学力に自信がなく、コミュニケーションが取れるか心配でした。実際にプログラムが始まって最初の頃は、言葉を発することをためらってしまい、自分の意思をなかなか伝えることができませんでした。そのため、相手も私がどのように考えているのかわからず、扱いに困っていたようでした。そして、あまり私に話しかけてくれなくなりました。それに気づいた私は、せっかくの機会を台無しにするわけにはいけないので、文法など細かいことは気にせず何とかして伝えようと努力しました。その結果、うまくコミュニケーションがとれ、仲良くなることもできました。そして、業務の内

容や詳しい説明はもちろんです，カンボジアの生活や文化，気候など様々なことを教えてもらうことができました（写真4）。やはり，黙っては何も伝わらず，伝えようとするために何でもやってみることが大切だと改めて実感しました。さらに，その国の文化や生活について実際にその国に住む人から聞くことで，より深い理解ができると感じました。



写真4. アプサラのスタッフとお昼ごはん

また，今回カンボジアに行って感じたことに，大気汚染の問題があります。大気汚染の問題があることは知っていましたが，どの程度のものなのかは知りませんでした。実際に町中を少し歩いただけで，砂埃と車やバイクの排気ガスでかなり息苦しさを感しました。地元の住民やバイクを運転している人にはマスクをしている人が多くいました。このように実際に現地に行くことで，起きている問題の程度を体感することができ，対策への働きかけになると思いました。

私はもともと海外留学に関心がありましたが，言語や費用の問題や海外で過ごすことへの不安から留学したいと思いつながら，なかなか一歩が踏み出せずにいました。しかし，このインターンシップに参加して，文化や言語の違う人々とのコミュニケーションや海外で過ごすことについて自信をつけることができました。また，文化の違う人と交流する楽しさも学びました。特に私は，現地の人から簡単なクメール語を教わりましたが，あまり知られていない言語をネイティブの人から直接発音などが学べる貴重な経験だと思いました。また，言語を教えてもらうときは，自然と会話が増え，活発なコミュニケーションができていました。海外留学をし，自分が普段持っているものとは違う文化や常識の中に身をおき実感することで，異文化に対する理解が深まると思っています。さらに，自らの国の常識にとらわれず，世界には様々な文化や違いがあることを知ることができると思います。私は今回このインターンシップに参加したことで，自信がつき，また異文化を体験する楽しさを知り，これからも海外留学に積極的に参加したいと思えました。

## 7) カンボジアでの生活

人間社会学域国際学類3年 大沢紗布（グループ4）

私はもともと、カンボジアという国に対する興味よりもアンコール遺跡群に興味があったので、旅行雑誌などでアンコール遺跡についての知識を中心に、カンボジアの治安、国民性などの情報収集をしました。旅行雑誌はわかりやすく簡潔に重要なことだけが書かれているので、カンボジアのインターンシップ前に他の国へ行っていた私は重宝しました。

インターンシップが始まって最初に驚いたことは人の温かさでした。アンコール整備公団の方々には本当に親切で、それも私たちにだけでなく、公団の職員やアンコール遺跡群の村人たちにもとても親切でした。そしてまた、公団内の仲間意識や結束がとても強いと感じました。日本では年功序列や上下関係が厳しかったりするけど、カンボジアではそのような人間関係のわずらわしさはまったくないように感じました。

私の仕事の持ち場は、アンコール遺跡群の中でも西部の担当で、西バライという貯水池のある場所でした。そこでは、貯水池の補完工事や運河の作成、西バライの観光地化などが行われていました。貯水池の補完工事は試行錯誤を繰り返して長い年月と労力を要するものだとわかり、一度壊されたものを元通りにすることの難しさを知りました（写真1）。

運河の作成は、乾季と雨季では作業進度が全く違い、乾季でないと作業ができないほどであると聞きました。運河作成中に雨季に入ったため作業が停止した運河の状態を視察しに行ったところ、現地の子供たちがその運河で楽しそうに水遊びをする様子を見て、この世界遺産のすばらしさを改めて感じました。寺院等の建築物のすばらしさはもちろんのこと、人々の生活と切り離すことのできない世界遺産は世界中でふたつしかない貴重なものだからです。そして観光客のあまりいない西バライが持ち場だったからこそ現地の人々の様子を見られたという点でも、私は自分の持ち場が西バライでよかったとおもいました（写真2）。

そんな西バライでも、観光客の分散を目的に西バライの観光地化を試みていて、有名なプノン・バケンに劣らないサンセットが見られる絶景



写真1. 西バライの堤防



写真2. 現地の子どもたち



写真3. 市場のひとたち

スポットを観光客向けに整備していました。この企画が成功していつかこの場所に観光客が大勢いるといいなと目を輝かせて夢を語った公団職員の顔が今でも忘れられません。そのように夢を持って仕事に挑む姿勢のすばらしさこそが私がカンボジアで学んだことです。また、市場やスーパーなどで働くカンボジアの人々を見てわたしがおもったことは、皆それぞれが自分の人生を楽しんでいるということです。カンボジアは貧しい国だとおもう人は日本でも多いと思います。けれども彼らの心の裕福さは日本人の何倍もあるように感じられました。経済的な裕福さと心の豊かさは必ずしもイコールではないのだと感じました（写真3，4）。

先述したように、夢をもって仕事に挑む姿勢こそがこれから社会に出る私に必要なことであると感じました。とはいっても、具体的にしたいことがあるわけでもないで、今後の大学生活では、興味のあることに対してはためらわずになんでもやっという気持ちになりました。私は大学生活で、アルバイトを中心にやってきましたが、将来につながる勉強も大切であると今更ながら感じたと共に、また、ボランティアなどの社会に貢献する活動などもやっていきたいとおもいました。

職場での、職員同士の仲間意識が高く上下関係のないざっくばらんな雰囲気が、日本で一般的に言われている厳しい職場の雰囲気とは大きく違うと感じました。肩を組みながら年齢は違うけど僕たちは友達だよと笑って言っていた職員の言葉を思い出すたび、そんな企業に就職できればとおもいました（写真5）。



写真4. 遺跡の警備員



写真5. アプサラのスタッフたち

## 8) カンボジアで得たもの

人間社会学域国際学類3年 山口莉奈 (グループ4)

今回のインターンシップは、私にとって、初めての海外、初めてのインターンシップ、と全てが初めてであった。海外に行くことに関して躊躇はなかったが、初めての海外が、旅行ではなく就業体験ということで、とても不安で少し恐怖すら感じていた。最も不安だったのは、現地できちんと意思疎通がとれるのか、お世話になるアプサラ公団の方とうまくうちとけられるのかということだった。

しかしそんな不安は就業一日目に吹き飛んだ。公団の方が気さくに接してくれ、自然と笑顔がこぼれた。私が研修を行ったところはアンコール公園内の西バライという、堤防に囲まれた世界最大の人工貯水池だった(写真1)。ここは以前にある国のチームが、貯水池の貯水量を増やしたり、周りの道路を整備しようと独自に開発を進めた結果、その方法が間違っただけであったために、大きく破壊されてしまっていた。当時の写真を見せてもらったが、木が全くなく、堤防が崩れ落ち、ところどころ大きな穴があくなど悲惨な状況だった。世界遺産においてもこのように、国際協力による開発が間違っただけに進んでしまった現実に強いショックをうけた。現在は堤防の修復、植林、西バライに観光客を呼び込むための整備、などを進めていたが、その回復力にも驚いた。実際に現地に行くと、ほんの二年前には土しかなかったところや堤防が破壊されていた場所が、木々に覆われ、堤防がきれいに修復されていた。オフィスでその行程の説明も受けたが、たいへん緻密な計算のもとに行われていた。時折、専門的で説明が難解なこともあったが、公団の方は丁寧になんども説明してくれた。アプサラ公団の方が熱意をもってこの仕事に取り組んでいること、またアンコールワット、カンボジア、自分の仕事に誇りをもっていることがよく分かった。



写真1. 業務地の西バライ貯水池

インターンを終えて私は四つの変化や考えたことがある。一つ目は日本人の英語力についてである。カンボジアでは英語が上手な人が多かったが、実際は学校では高校からしか英語の授業はないようだ。(もちろん小さいころからプライベートスクールに通う富裕層の子供もいるが。)日本人はたくさん勉強している割にあまり英語が使えない印象があるが、やはりそれは実際に聞いたり話したりする場が少ないからだと思う。私はもともと英語がよくできるほうではないが、二週間、英語でしか意思疎通できない状況におかれただけで、初日より最後のほうがはるかに英語に慣れたと自分で感じた。日本の中学・高校での英語

インターンを終えて私は四つの変化や考えたことがある。一つ目は日本人の英語力についてである。カンボジアでは英語が上手な人が多かったが、実際は学校では高校からしか英語の授業はないようだ。(もちろん小さいころからプライベートスクールに通う富裕層の子供もいるが。)日本人はたくさん勉強している割にあまり英語が使えない印象があるが、やはりそれは実際に聞いたり話したりする場が少ないからだと思う。私はもともと英語がよくできるほうではないが、二週間、英語でしか意思疎通できない状況におかれただけで、初日より最後のほうがはるかに英語に慣れたと自分で感じた。日本の中学・高校での英語

学習は大半が机に向かって鉛筆を動かすか、数少ない会話の授業でも、決まり文句を繰り返す程度だ。もっと英語で意見を交換したりするような授業をしたらいいのと思った。二つ目は異文化に対して躊躇する気持ちがなくなったことである。二週間公団の人と現場で過ごし、時には食事もご一緒させていただいた。自国とは違う習慣や食べ物に触れて、毎日が新鮮であった。この変化によって私は、日本で過ごすときでも、自分と違う生まれ、考えの人と接することに以前より尻込みせずに積極的になれるだろう。三つ目は、カンボジアの人の温かさやアンコールワットの美しさに触れ、アプサラ公団の方がカンボジアを誇りにしている様子を見て、逆に自国の文化のよさも見つめなおしたいと考えた。私がカンボジアでたくさんの感動をもたらしたのと同じように、日本にもたくさんの観光客が足を運んでくれている。そんな自国の文化を自分はまだまだ知り足りない。まずは、お花見でしか行ったことのなかった兼六園にゆっくり足を運んでみようかと思う。四つ目は、海外にただ行くのではなく、そこでたくさんの人との出会いがあり、その人の内面のよさを知ることが、その国のことをもっと知りたい、言語を習得したいという学習意欲につながると身をもって感じたことだ。実際に私は、現地で使っていた英語だけでなく、次にカンボジアに行く機会があれば、カンボジアのもともとの言語であるクメール語を多少なりとも勉強して行きたいと思った。大学生生活はあと半分もないが、カンボジアだけでなく、いろんな国に足を運んで、もっとたくさんの素敵な出会いをつくりたい (写真2)。



写真2. アプサラ公団の方と



#### 4. チューターたちの報告



## 1) 2度目のカンボジアで学んだコミュニケーションの方法

人間社会学域国際学類3年 畠中 瞳

はじめに、昨年のインターンシップに引き続き今年もこうしてチューターとしてカンボジアに行くことができ大変嬉しく思います。昨年はよく学び、よく食べ、よく休み、と十分にカンボジアを満喫しました。今年も基本的には変わらないのですが、それに加え人との繋がりやチューターとしての責任感を感じることができました。

チューターの業務は基本的にアプサラ公団のオフィスにいたことが多かったため、オフィスにいたいろんな職員の方と話す機会がありました。昨年自分のグループの担当だった職員の方とは去年の業務中の思い出話をしたり、去年は違うグループの担当で話す機会が少なかった方とはお互いに「私のこと覚えてる？」という挨拶から始まり頻りに話さうになったり、初めて会う方にも気さくに声をかけていただいて自己紹介をして知りあったり、とオフィスにいる職員ほぼ全員と話したのではないかと思うほどたくさんの方と交流を深めました。職員の方々を含めカンボジアの人々は温厚でやさしい人がほとんどでした。そのおかげで私も下手な英語ながら積極的に話しかけることができたし、なんとか言葉が通じることが自信にも繋がりました。お互い母語でない言語で会話することは日本ではなかなか経験できないことですので海外のインターンシップならではの利点だと思います(写真1)。



写真1. 昨年よりも親しくなれた副総裁ブウさんと

職員の方との交流で特に印象に残っているのは、去年のグループの担当者だった職員の方とお互いにクメール語と日本語の教えあっていたときに、周りにいた職員の方々も話に入ってきてくれて気付いた時には20人近くの職員との日本語・クメール語交流教室になっていたことです。その交流のなかで気付いたことは、お互いに発音しづらい音があることでした。自分では言われた通りにクメール語の単語を言っているのになぜかむこうの人には笑われる、という繰り返しを



写真2. 仲良しの職員のデスク ここが本拠地でした

経て、なんとかネイティブにも渋々の合格をもらいながらクメール語を覚えました。それ以降、そこで覚えたクメール語を日常的に使っていこうとするのが私の日課となり、滞在をより充実させることができました。

基本的に会話は英語でなんとか成り立ってはいましたが、私の拙いクメール語でも使おうとする姿勢が相手とのコミュニケーションを図る方法のひとつとなり、そういう意味でも言語の大切さを改めて実感しながら親交関係を広げることができました（写真2）。

カンボジアでのインターンシップのなかで、私たちは言語も年齢も違う多くの人々と短期間で出会いました。言語が異なるという日本よりも自己表現の難しい場所でいかに自分を知ってもらうか、私は自分なりの答えをカンボジアで見つけることができました。この成果を次はもうすぐ始まる就職活動に活かしていきたいです。

最後に、今年はチューターとして行ったことで責任感を持つことも学びました。全体の状況を把握すること、全体に的確に連絡を伝えることの難しさを日々感じながら、それでも他のチューターと連携して無事にインターンシップを終えることができ嬉しく思います。この経験は社会にでたときにきっと役立ちます。

そして、これからもこのインターンシップが継続され多くの人がカンボジアで素晴らしい経験していくうえで、なにかしらのフィードバックをカンボジアのためにできたらいいなと思います（写真3，4）。



写真3. ルン・タ・エク エコビレッジの視察



写真4. ルン・タ・エク エコビレッジの子ネコ

## 2) チューターとして参加した2度目のカンボジア

人間社会学域国際学類3年 宮本亜由美

私は、昨年の夏にインターンシップ生として初めてカンボジアに行きました。一回目のカンボジアは、英語でコミュニケーションを取ることの思っていた以上の困難さ、そして広大な遺跡公園全体を管理しているアプサラ公団のフィールドの広さとそこにたたく遺跡の素晴らしさに、ただただ驚くことが多かったです。

しかし、今回は二回目ということでカンボジアという国に慣れた自分がいて、前回のようになんか驚くよりも、ゆったりとした気分でカンボジアを楽しんだり、カンボジアの暮らしを知ったりすることができたと思います。

今回チューターの業務をこなしつつも、自分の担当ではない日を使って、塚脇教授と同じチームで、主に植物を専門にしておられる荒木さん（埼玉大学准教授）の、村への聞き取り調査に、二日間同行させていただくことができました。調査に同行させていただいた理由は二つあります。まず、私も自分の卒論で、もしかしたらこの先聞き取り調査をする機会があるかもしれないので、やり方を見てみたいと考えたのが一つ目の理由で、二つ目の理由は、純粋に村の人々の暮らしを肌で感じてみたいと考えたからです。



写真1. 聞き取り調査で仲良くなったおばあちゃん

聞き取り調査中は、荒木さんとアプサラ公団の人（Bora）とタクシーの運転手さんと私の四人で行動しました。調査は荒木さんが聞きたいことを Bora に英語で伝えて、それを Bora が現地のクメール語で村の人に質問し、その答えを Bora が英語に直すという、Bora に通訳としてサポートしてもらう形で行われました。調査のアポイントメントは基本的に Bora が取ってくれているようでした。



写真2. 聞き取り調査に集まってきた子どもたち

聞き取り調査をする上で、参考になると思われることがいくつかありました。まず、荒木さんは、聞きたいことの要点をあらかじめ考えてきて紙にまとめておられました。その中には、インタビューさせてもらっている人の名前や家族構成、

収入源などの基本事項は民家である際は必ず聞いておられました。また、あまり聞きたいことを聞き出せなかった時は、他に知っていそうな人がいないかを聞いて、次のインタビューに繋げておられました。また、言語の違いでなかなか意味合いが伝わらない時は、絵に書いて伝えておられた点も参考になりそうだと感じました。個人的にすごく良いと感じたのは、荒木さんが、聞き取りに協力してもらった民家の人に日本から持ってきた扇子をあげたり、子供がいた時は飴を手からこぼれそうなくらい沢山あげたりしていたことです。飴は日本から持ってきたものと現地で購入したものを混ぜてあげているとのことでした。このような心配りが円滑な聞き取り調査につながるのだろうと感じました。

また、カンボジアの村の家々を一軒一軒巡って聞き取り調査をした際に一番驚いた点は、カンボジアの村の人々は他人に対して非常に寛容であるという点です。日本みたいに、家と家の垣根が高くなく、近所付き合いも日常的であるのが私には驚きでした。例えば、ある家の高床式住居の下のハンモックに子供が沢山寝ているのに、その家自体には子供はおらず、皆近所の子であるということもありました。そんな寛容な文化が根付いているおかげなのか、飛び込みでも話を聞かせてくれる家ばかりでした。



写真3. 聞き取り調査のようす

今回は二回目ということで、一回目の時にはできなかった経験ができて良かったと思います。聞き取り調査についてなんとなく概要がつかめたのはもちろんのこと、カンボジアの人々のゆるやかな暮らしぶりを感じられて、また日本にはあまりない他人への寛容さ、そして近所付き合いの大切さなどを感じることができて、非常に意義のある日々であったと感じています。

### 3) 2回のインターンを通して学んだ最も大切なこと

人間社会学域人文学類 3年 河原由貴

私がこのアンコールインターンシップに参加するのは今年が二年目である。一年目はインターンシップ参加生として実際に公団で業務を行い、その経験によってカンボジアに、アンコール遺跡に興味を持つようになり、二年目である今年、参加学生や教授の補助を行うためのチューターとして参加した。私は大学で文化遺産学を専攻しており、一年目の参加は実際に世界遺産を見て遺跡を管理する公団で就業体験をすることで、自分の専攻に関する経験や知識を得ることを目的に



写真1. チューターとして参加

していたが、そこでアンコール遺跡自体に興味を持ち、もっと深くこの遺跡について学びたいと思うようになり、二年目にチューターとして参加し、空いた時間で遺跡をめぐるなどして自分なりにアンコール遺跡の理解を深めることを目的とした。

大学で世界遺産のことや考古遺物の修復の仕方などを学んでいたつもりでも、やはり実際に遺跡を訪れると新しく知るたくさんの事実や問題に触れることになった。まず感じたのが、現地ではアンコール遺跡は現在も信仰の場であり、遺跡公園内には住民もいる、生きた遺跡であることである。私はアンコール遺跡を過去の遺産として、朽ちないように修復し保護し後世に伝えていくものだと考えていた。しかし実際は遺跡の寺院内には供え物があり、遺跡の周辺で生活している人と出会うことができる。それゆえに研修先の遺跡管理公団では遺跡と住民両方に考慮した活動を行っていた。そうしなければこのアンコール遺跡は管理できない。私はこの事実をあらかじめ知っていたはずなのに、それが実際にどういうことなのか、どういった雰囲気で行われているのかということ、このインターンで現地に行き行って初めて理解することができたと思う。



写真2. 世界遺産で暮らす人々

そうはいつても根本的な遺跡の保護や開発の概念は同じであるのだから、他の現在使われていない遺跡の保護の仕方とそう変わらないだろう、とっていた。しかし実際にはアンコール遺跡公園内の住民増加による遺跡の保護と開発の対立や、現地住民に配慮した観

光地化など、まず遺跡を保護するに於ける根本的な立場から大きく異なっており、保護に関わる人々がみんなその事実を当然のこととして受け入れているのである。私は資料から学んで頭の中で考えるだけでは不十分であることを、身をもって感じた。そしてこの少し特殊で、それゆえに大きな魅力のあるアンコール遺跡が好きになり、興味を持つようになったのである。他にもたくさんの方のことを学んだが、私はこれを学べたことが何よりも印象的で、とても大事なことであると思っている。

最後に、この2回のインターンシップに於いて、受け入れ先の APSARA 公団の方々や、他にもアンコール遺跡に関わるたくさんの方々にお世話になり、そのおかげでこのとても得難い経験ができた。この恩を何らかの形で還すことができるように、と考えている。

## 5. 事務職員の視点から見たアンコールインターンシップ

北地区事務部学生課学務第一係 辻谷友紀

### 1. はじめに

平成 23 年度のアンコールインターンシップは、多くのサポートスタッフに恵まれた。昨年の経験者である 3 人の 3 年生（チューター）に加え、塚脇教員の研究チームのメンバーである埼玉大学の荒木准教授、日本大学の八木助教の 5 名が、それぞれの立場から 8 人の参加者を支援した。このような中で、事務系スタッフとして同行した私が何をしたのか、また、何をすべきだったのかということ、来年度に向けた引継ぎマニュアルとして以下にまとめてみた。

### 2. 「できた」と思うこと

私はこのインターンシップで、大きく分けて 3 つのことを成したように思う。

- (1) 事務仕事をした
- (2) 一定の抑止力を発揮した
- (3) しっかりと経験値を蓄えた

#### (1) 事務仕事

事務仕事は当然ながら一番分量の多い部分だ。それをさらに分割すると、事前サポート、移動サポート、そして事後サポートに大別することができる（事後サポートに関しては現在も継続中）。

#### ○事前サポートー単位とパスポートに苦勞する

主に渡航準備に始終した「事前サポート」では、数回開催されたオリエンテーションの出欠管理と、パスポートの写しなどの提出物管理を行った。23 年度は航空券予約の際に「この日を超えると飛行機代が高くなってしまう」というボーダーがあり、パスポート未取得学生の対応にハラハラした。次年度は、選考が決まったら即、パスポートの有無を確認し、すみやかに取得させるのがいいと思われる。

また、国際学類生以外の参加者が、本インターンシップの経験を単位に変えることができるように「異文化体験実習」の担当教員と調整を行った。22 年度にはなかった措置であったため調整が遅れ、本来学生が出席すべきオリエンテーションを免除していただくなど、イレギュラーな対応をして頂いた。よって、次年度は、国際学類以外の参加者に対しては速やかな周知が必要である。

#### ○行きの移動ー高速バス～関西国際空港

チューターも含め、インターンシップ参加者は現地シエムリアップ空港にて塚脇教員と

合流するというスケジュールであったため、移動サポートは最もボリュームがあったと思われる業務だった。

金沢から関空までは生協チャーターのバスを利用したため、学生の居住の、最寄りのコンビニまで迎えが来た。そこで配慮したのは「寝坊」と「忘れもの」だ。寝坊した学生を起こすために全員分の携帯番号と住所を教務システムからダウンロードし持参しておいた。幸いにして、23年度は全員が予定通り待ち合わせ場所におり使う機会はなかったが、次年度申込み様式には住所及び携帯電話を記載させる欄を設けるべきだと思った（教務システムデータに記載された情報は古い可能性がある）。

忘れ物は、必須アイテムであるパスポートとその写し、現金、写真に限って確認をした。こちらでも忘れた学生はいなかったが、現地に到着し「写真を切っていない」という事態に遭遇した。写真は有無だけでなく、きちんと決められたサイズに切ってきたかを確認するといひ（予備の写真を塚脇教員より全員分託されていたので、それを渡して事無きを得た）。また、事前に生協に提出した学生全員の「パスポートの写し」も、念のためカバンに忍ばせておいた。これも幸いにして使う機会がなかった。

関空には朝7時に到着するようバスの運行を調整してもらった。関空のお店は7時オープンという所が多く、関空で待機するよりは、バスの中で寝ていられる方がずっといいと判断したためだ。団体カウンターを集合場所に定め、7時から8時半までをフリータイムとし、各自朝食をとってもらった。

## ○行きの移動ー関西国際空港～シェムリアップ空港

関空→ホーチミンは、機内の案内も日本語であるため、特筆すべきことはない（機内食がしっかりと出る、くらいだろうか）。

ホーチミンのタンソンニャット国際空港では「乗り継ぎ」となるため、日本にいたる間に乗り継ぎカウンターの位置を調べておいた。乗り継ぎ手続き完了後は、搭乗口が何番ゲートになるかを確認し、解散、自由行動とした。スーツケースなどの大荷物は、勝手に積み替えてもらえるため、関空で預けたあとはシェムリアップで受け取る事になる。よって、置き引きなどの心配もあまりなく、免税店やおみやげ店の散策を楽しんだ。



写真1. タンソンニャット国際空港の土産屋

タンソンニャット国際空港からシェムリアップ空港までは、フライト時間は1時間。そこで機内食を食べ、さらに出入国カードを始め必要となる書類を書かなければならないので、とても慌ただしかった。カードは飛行機搭乗時に客室乗務員から手渡されるのでしっ

かりともらっておかなければならない（私は何故かスルーされてしまったので、全員が搭乗したあと取りに戻った）。出入国カードに何を書けばいいのかは、全て英語で説明されている。よって、事前にインターネットで見本を入手しておくことが望ましい。「宿泊ホテルの連絡先を書け」などの記載もあるため、要注意だ。24年度は事前指導時にこの見本も配ればよいと思う。

### ○行きの移動－シェムリアップ空港での入国審査

シェムリアップ空港では入国審査がある。出入国カードとあわせ、入国書類を作成・提出しなければならない。また、入国費用に写真及び 20US ドルが必要になるため、それらを準備しスムーズに審査を終えなければならない。ただ、夏休みシーズンであるため、周囲はほとんどが日本人、人数も多く待ち時間がかなりあるため、ゆっくりと迷いながら書類を書くことができた。入国管理官も簡単な日本語が出来る人が多く、気さくに対応してくれる。



写真2. シェムリアップ空港に降り立つ

入国手続きが終われば、手元にはパスポートと切り離された出国カードが残る。パスポートはもちろんのこと、この「出国カード」もなくしてはならないものなので、学生に対する周知が必要だ。これで、荷物を受け取って、塚脇教員と合流することとなった。

### ○滞在中－リコンファーム

滞在中は「リコンファーム」という手続きを行った。長期に渡る滞在となるので「間違いなく予約した便で帰ります」ということを航空会社に告げる手続きとなる（航空会社によっては不要な場合もあるようだ。23年度利用したベトナム航空は必要だった）。これは鹿島学類長が同行してくださったため心強かった。具体的には、現地の航空会社のオフィスで、自分のものも含め、学生全員の E チケットを提示し、代表である私の泊まっているホテルや部屋番号など、必要情報を告げるだけで終わった。

### ○帰りの移動－台風とイレギュラー

帰国時は、鹿島学類長と関西国際空港まで一緒であったため、これまた大変に心強かった。おかげでほとんど印象に残っていない。ただ、関西国際空港付近に台風が接近していたため、飛行機が遅れ国内移動に影響が出る可能性が生じた。それゆえ天気予報及び航空機の欠航情報には気を配った。しかしながら、乗り継ぎのノイバイ国際空港ではうまく無線 LAN を捕まえることが出来ず、結局出たとこ勝負になってしまった（幸いにして欠航や

遅れはなかったが)。シムリアップ滞在中は現地の携帯を持つため連絡に不都合はないが、中継の空港では無線 LAN を捕まえられなければ完全に通信手段を失ってしまう。次年度、何らかの対策が必要かもしれないと感じた（例えば、行きと帰りの二日間のみ、日本のキャリアに国際ローミング契約を行うなど）。

幸いにして台風は通過し、着陸時、少し揺れて怖い目に会う程度ですんだ（帰国が前日であったなら欠航していたようだ）。しかしながら、関空から金沢ではイレギュラーが起こった。

出国前の事前打ち合わせで、税関通過後にバス会社に電話をかけ、待ち合わせ場所を打ち合わせる予定だったが、予約に手違いがありバス自体が到着していなかった。そこで、バス会社の担当と、生協の担当に電話をかけ、確実にバスが到着しておらず、かつ、到着の予定もないことを確認した上、JR にて金沢に帰った。急な日本円の出費となったが、たまたまクレジットカードを 1 枚だけ持っていたのでそれで全員分をまとめて支払うことができた。

台風の影響で、途中電車が 30 分程度遅れたが、結果的にバスで帰るよりも早く金沢に着くことができた。

## ○事後サポート一様々な提出物管理とシンポジウム

事後サポートは奨学金受取のための必要書類収集から始まり、本レポートの執筆も含め、現在も進行中だ。

奨学金に関しては「パスポートの出入国のハンコがあるページのコピー」と「レポート」の提出が必要になる。前者は関空のコンビニで事前に貰う予定であったが、予想外のトラブルですっかりと失念していた。今後も、ランチョンセミナーでの発表や、他学類の学生は、異文化体験実習の事後指導が待っている。さらに、現時点（10 月）では先の話だが、1 月には国際シンポジウムも予定されている。

### （2）一定の抑止力

「一定の抑止力」とは、私の印象に過ぎず効果を立証することはできない。しかしながら、学生だけの集団の中に事務職員が一人居たということで、ある程度メンバーの手綱を締める役割を果たせたのではないかと思っている。

インターンシップに従事する平日の業務時間以外は、学生も私も「自己責任」という言葉のもとで



写真 3. 2 週間を過ごしたゴールデンア  
ンコールホテル

完全に自由になる。どこに何を食べに行こうと、どんな店に入ろうと、その行動を制限することはできないし、もちろん、管理することも現実的ではない。丁寧な事前指導を行い、危険な場所や、してはいけないことを事前に周知してはいるが、最後は学生たちの「良識」に頼ることになる。

### ○コミュニティーの形成

23年度のインターンシップでは、学生たちの「良識」を喚起する力がとてもうまく機能していたように思う。まずもって、参加者の同級生であるチューター達がしっかりと場をまとめてくれた。渡航後数日は、彼女ら3人を通してコミュニティーが形成されていったように思う。私も買い物の作法や食事処の開拓など、全面的にチューターたちを頼っていた。やがて、だいたい一緒に行動するグループのようなものが形成され、グループごとに、余暇の過ごし方に個性が出るようになっていった（マッサージは外せないグループや、おいしいお店情報を開拓していくグループ、行き当たりばったりを重視し、とりあえず目についたお店に入ってみるグループなど）。

### ○良識の喚起

そんな中で、常に学務係である私が同じホテルに居ること、そして、要所で塚脇教員や、荒木准教授、大八木助教ら「大人」がコミュニティーに入っていくことで、学生たちの「良識」が喚起され、良いコンディションで日程を終えることができたと思う。食あたり以外の体調不良が発生しなかった点も、疲れを次の日に持ち越さないような、良識ある体調管理ができていたためだと考えられる。

### (3) しっかりと経験値を蓄えた

「しっかりと経験値を蓄えた」とは、事務系職員を海外に派遣するという当初の目的の達成である。海外渡航経験が殆ど無い私が、2週間にわたってカタコト英語のみで生活を営めたということはもちろん、世界遺産であるアンコール遺跡群の威容に触れることもできたし、それを支える現場の様々な課題に触れることもできた（このあたりの詳細は学生たちのレポートに譲る）のは、大きな経験となったと思う。



写真4. アンコール・ワットを臨む

### ○英語に対する態度の変化

残念ながら、その経験をどう業務に活かすのかという具体的なプランはここで示すこと

ができない。しかしながら、明らかに渡航効果であるというエピソードは紹介できる。それは「英語を聞き、話す」ようになったということだ。

これまで、外国人教員や留学生に接する際、理解出来ない単語は完全に聞き流していたように思うが、現地では理解出来ない単語だらけであったこともあって、それらを含め、トータルで意味を類推するような聞き方ができるようになったと思う。また、これまではなんとか文法を構築して話そうという思いから、結果として発声のタイミングを逃し相手の英語を一方向的に聞くだけで終わっていたものが、単語を並べるだけでもいいので、なんとか意味を伝えようという話し方にいつの間にか変わっていた。この変化は自分自身で感じられるほど確かなものだった（だからといって語彙が増えたり、英語に堪能になったりはしていないが）。

### 3. おわりに一やっておくといいこと

最後に、やっておくといいと思ったことを3つ述べて本レポートを締めくくろうと思う。

第一に、学生たちにアンコール遺跡群の地図と、簡単な歴史を頭に入れて渡航してもらうべきだと思った。それだけで、公団の方たちがどんなことを説明しているのかを類推できる材料がグッと増え、学べることも多くなると感じた。

第二に、相手の英語を理解する努力をもっとしてから渡航すべきだと思った。これは勉強をしてもいいし、テクノロジーを準備してもいいと思う。勉強はなかなかできないという場合であっても、それなりに良い電子辞書を準備していくことは容易いのではないだろうか。

第三に、準備は入念に行わなければならないが、現地では気楽に居るのがいいと思った。学生たちは自分が思っているよりずっと大人で、サポートせねばならないことは殆ど無かった。私が「できた」と思うことに「現地サポート」が含まれていないのはそのためである。

## 謝 辞

事務所引越しの最中であるにもかかわらず、2週間にわたって本学の学生を受け入れてくださったアプラサ公団の皆様。2週間にわたって私の仕事を免除してくださった国際学類の先生方、および北地区学生課の皆様。そして、本インターシップを企画し、管理してくださっている塚脇先生。最後に、2週間の体験を立派に勤め上げた11人+2名の学生のみなさん。本当にありがとうございました。



写真5. 帰国、お世話になった運転手さんを囲んで

## 6. 資料

### 2011 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップの概要

#### 1. 参加者

##### (1) インターンシップ学生

- 藤巻晴香（人間社会学域国際学類国際社会コース3年，グループ1）  
藤谷真有（人間社会学域人文学類フィールド文化コース2年，グループ1）  
福田 静（人間社会学域国際学類アジアコース3年，グループ2）  
岩永有加（人間社会学域経済学類経営・情報コース2年，グループ2）  
村上 栞（人間社会学域人文学類フィールド文化コース2年，グループ3）  
大久保陽葉（人間社会学域国際学類日本・日本語コース3年，グループ3）  
大沢紗布（人間社会学域国際学類米英コース3年，グループ4）  
山口莉奈（人間社会学域国際学類国際社会コース3年，グループ4）

##### (2) チューター

- 畠中 瞳（人間社会学域国際学類国際社会コース3年）  
河原由貴（人間社会学域人文学類フィールド文化コース3年）  
宮本亜由美（人間社会学域国際学類アジアコース3年）

##### (3) 北地区事務部

- 辻谷友紀（北地区事務部学務課学務第一係）

##### (4) 連絡教員

- 鹿島正裕（人間社会学域国際学類長・教授，8月28日～9月4日）  
塚脇真二（環日本海域環境研究センター・教授，8月18日～9月5日）

##### (5) アンコール世界遺産環境調査チーム ERDAC

- 荒木祐二（埼玉大学教育学部技術教育講座・准教授，8月19日～8月26日）  
本村浩之（鹿児島大学総合研究博物館・教授，8月24日～8月31日）  
大八木英夫（日本大学文理学部地球システム学科・助教，8月26日～9月3日）

#### 2. カンボジア側受入機関/責任者

アンコール遺跡整備公団 (Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap, Kingdom of Cambodia) /Hang Peou 副総裁兼水管理部門長

#### 3. 各グループの担当業務

- グループ1：アンコール・トム遺跡古代水利網の再整備事業  
グループ2：ルン・タ・エク エコビレッジの整備事業  
グループ3：北バライ貯水池の環境保全・観光整備事業  
グループ4：西バライ貯水池の環境保全・観光整備事業

#### 4. 全体日程

- 3月8日(火)：第1回アンコール・インターンシップ実施委員会
- 4月7日(木)：アンコール・インターンシップ説明会(国際学類生対象)
- 4月19日(火)：アンコール・インターンシップ説明会(全学生対象)
- 4月25日(月)：アンコール・インターンシップ募集開始
- 5月24日(火)：アンコール遺跡整備公団と打合せ(プノンペン)
- 5月25日(水)：アンコール・インターンシップ参加学生の選抜
- 6月6日(月)：アンコール遺跡整備公団と打合せ(シェムリアプ)
- 6月17日(金)：第1回アンコール・インターンシップ事前説明会
- 6月27日(月)：第2回アンコール・インターンシップ実施委員会
- 6月30日(木)：インターンシップ事前講座(国際学類)
- 7月15日(金)：第2回アンコール・インターンシップ事前説明会
- 7月20日(水)：第3回アンコール・インターンシップ実施委員会
- 8月20日(土)～9月4日(日)：インターンシップ期間(委細は下記)
- 10月27日(木)：インターンシップ報告会(総合教育棟 A1 講義室)
- 12月26日(月)：インターンシップ報告書の出版

#### 5. 渡航日程

- 8月20日(土)：金沢(チャーターバス)→関西空港( VN941 )→ホーチミン( VN829 )  
→シェムリアプ
- 8月21日(日)：アンコール遺跡世界遺産公園の見学，滞在準備など
- 8月22日(月)：アンコールワット寺院の見学(午前)，インターンシップ始業式・各担当者との打合せ(午後)
- 8月23日(火)～8月26日(金)：インターンシップ業務に従事
- 8月27日(土)：トンレサップ湖見学(午前)，自由行動(午後)
- 8月28日(日)：シェムリアプ川源流見学(午前)，自由行動(午後)
- 8月29日(月)～9月2日(金)：インターンシップ業務に従事
- 9月3日(土)：自由行動(午前)，公団職員らとの昼食会，Hang Peou 副総裁との面談(午後)，シェムリアプ( VN800 )→ハノイ
- 9月4日(日)：ハノイ( VN944 )→関西空港( JR )→金沢

塚脇真二

## 2011 年度アンコール遺跡整備公団インターンシップ報告書

アンコール遺跡整備公団インターンシップ実施委員会

深澤のぞみ（人間社会学域国際学類） 鹿島正裕（人間社会学域国際学類）  
村上清敏（人間社会学域国際学類） 齋藤嘉臣（人間社会学域国際学類）  
塚脇真二（環日本海域環境研究センター）

発行所	金沢大学人間社会学域国際学類 〒920-1192 石川県金沢市角間町 TEL (076) 264-5455 FAX (076) 264-5468
印刷 発行 印刷所	2011 年 12 月 16 日 2011 年 12 月 26 日 前田印刷株式会社 〒924-0004 石川県白山市旭丘 2-16 TEL (076) 274-2225 FAX (076) 274-5223

